

寄書

日本水彩畫會研究所長野支部月次會報告

去五月中旬發會式を舉行いたし候當支部は今日第一日曜日（六日）を以て第一回の月次會を當地師範學校にて開催仕候、時は初夏新緑滴るが如き候、會員一同先月來思ひ々に自己の得意なる點に向つて研究を重れ居り候事に候へば、當日午前九時より續々來會、會員殆ど全部出席相成候。作品の集れるもの八十余點長野附近の勝景を悉く一室の中に集めたるの觀有之候。午前十時幹事より會務の報告、夏季講習會等の件につき報告あり終て出品繪畫につき互評會を催し候兎角斯る會にては他人の出品畫につきては遠慮のみ致居り十分なる批評を加へざるが例に御座候かゝる風は相互の研究上却てよろこばしからざる義に候へば本會にては其弊風を去り思ふ存分忠告も惡口もなす積りにて當日の批評の如きも實に盛なるものに有之候。「君の繪は光線の方が間違つて居る、此畫き方ではお日様が二つあるとしか思へぬ」「此繪は色が非常に生だこれを見た感じはまるで地獄極樂の繪を見る様だ」「此繪はまるで色が腐つて居る」などの批評は随分喝采を得申候、しかし決して惡口のみでは無之中には「君の繪は確に専門家を凌ぐの概がある、實に感服の外ない」とか「君は急に手を上げた僕等も大に奮發せんければならぬ」などいふ虚偽ならぬ賛辭も出て申候、批評のみにて殆ど二時間を費し實に趣味ある集會に有之一點の俗氣もなく、野心もなく當日

の會場には定めし美の女神が降臨せられつゝありしこと、信じ申候、右報告候通り當地の洋畫界は至て幼稚には候へども十分の勇氣と希望とを以て活躍いたし居候間御安意致下度候右大要のみ御報告に及び候也

明治四十二年六月

支部幹事

吾が鎌倉に來れ

鎌倉 堀谷紫海生

山と水との美を兼ね有する寫生の好適地たる鎌倉は、古刹寺院多く、小川もあつて、遠望にも富んでゐる所である、長谷の大佛、觀音附近にも描かうと思ふ所が多く、友人が來る度毎には必ず一度は筆をスケツチブツクに止めるのである、常に野原に海岸に寫生する者ありて、非常に余の心を動かさしむるのである、其外描くべき材料が多い、中にも鶴ヶ岡八幡宮は、昔の有様を其儘に、何となく壯嚴を極め、金殿朱閣老松の間に、隠れ見えて實に畫を見る様な思ひがする、南は相模灘に面し、江の島は眼前に横はつて、由井ヶ濱の波濤蒼翠また掬すべきである、稻村ヶ崎右に突き出て眞帆片帆往來して、朝夕の眺めは別である、青松の間に漁家の點綴し、遠くは伊豆連山三浦半島を望み、一として畫に成ら無い處は無い、今度の講習會はかゝる地に開かるゝである、約二週日、その間の畫的生活は有益有趣味、大に愉快であらうと思はれる、各地の諸兄よ振つて鎌倉へと集つて來給へ、余等は双手を舉げて諸君を歡迎するであらう至囑至

々。

余に慰藉を與へたる模様畫本

秋田 綠

葉

余に慰藉を與へた模様畫本とは余の附した假名で決して新機發明品でも何んでもない、たゞ玩弄物として、世に有りふれた無邪氣なる遊戲的一の目鏡に過ぎない。まだ頑是ない入校前の時分は、彼を最も愉快なる物として楽しんでいたのであつた。其以後は忘れてゐたが、鉛筆畫を書いて居たのが初めて其れに彩色を施して模様畫を學ぶ様になつたので、意外にも昔の無邪氣なる遊戲的玩弄物の彼を新らしい記憶によび起したのである。

其れと云ふのも彼はよく様々の模様を現はすから或は參考の資ともなるうかと思ふたのが果して余の想像通りであつた。其拵方は此に記する迄もないが先づ巾二寸縦八寸程のガラスの細長い板を三枚を、各々縦の切口と切口とを合して三測面を有せる角罫を作り、其外面をば黒き紙を以て覆ひ一方の口には白色の薄き紙を張り、この器械は出來上つたのである。其が出來たら今度は其中に、細かき色々の紙切なり花瓣なり、自分の思ふがまゝの物品を入れ(但し一度にあまり多數を入れざるを可とす)手を以て其をふり中を覗く時は、其度毎に千差萬化種々様々の彩色を有せる美麗なる模様が現はれる。この器械によれば、我々初學者の最も辛苦した形のとりよう色の塗り様など座ながら彼の自然の模様を書く事ができるのである。今は彼を模様畫に

於ける活手本とし座右の師とし彼に因つて慰藉ある教訓を與へられてゐる。

スケツチの一時間

長野花咲町

パレツト

筆を動かし初めたら一切夢我夢中、三脚が倒れ掛つたので氣がつくと後に人かゐる。ハツと振りむくと同級のK君とT君だ始めて話をする。村の少女が軟かい春の日を被つてゐる白い手拭一ぱいに浴びて来る。一寸見て行き過ぎる。友も去る。後は一人ぼっち。前の榮の花の間から雲雀がバツと舞ひ上る。汽車に驚かされて……影は最う見えぬ。今度は何が来るだらう。

命

「繪ばかり書いてゐて何うするんだ」と何時でも親父の目玉が光るのだ、と同時に頭も。今日も「一寸先生の所へ行つてくる」と門を出た。

肩には何時の間にかスケツチ箱が掛つてゐる右手はしつかり三脚を握つてゐる。

何處と云ふあてどもなく只無意識にブラブラ歩いてゐる。繪は矢つ張り僕の生命だ。